

投稿規程と執筆細則の一部改定について（2022年2月21日）

第29期『文化人類学』編集委員会
石井美保（編集主任）
飯田 卓（編集副主任）
川口幸大（特集主任）
湖中真哉（レビュー主任）

（1）87巻1号以降の「長文英文要旨」の廃止について

第29期編集委員会では、2020年5月の発足以来、『文化人類学』の投稿に関するルールの中でも、英文要旨に関する規程の検討を行ってまいりました。

84巻1号より、『文化人類学』に掲載された論文（原著論文、萌芽論文、展望論文、および特集論文）については、「短文英文要旨」と「長文英文要旨」の2種類の英文要旨を著者に提出していただき、このうち「短文英文要旨」は『文化人類学』に掲載し、「長文英文要旨」はJICAに掲載するという方式を採用してきました。

「長文英文要旨」のJICAへの掲載は、日本語で書かれた論文の概要を国際的に発信するという意義をもつ一方で、複数の「長文英文要旨」を掲載することによってJICAのページ数が増加し、結果的に出版にかかる経費の増額が学会の予算を圧迫しているという事態が問題となっていました。

『文化人類学』編集委員会は、JICA編集委員会とともに上記の問題を検討してまいりましたが、結論として、87巻1号以降は「長文英文要旨を廃止する」という変更を行うことにいたしました（2021年7月4日理事会承認）。

したがって、2022年6月末に刊行予定の87巻1号以降に掲載される論文については、「長文英文要旨」の提出は必要ありません。

（2）「投稿規程」、「執筆細則」、「投稿に関するよくある質問」、「査読過程に関するガイドライン」の改定について

「長文英文要旨」の廃止にともない、「投稿規程」、「執筆細則」、「FAQ」、「査読過程に関するガイドライン」を一部改定しました。

第29期編集委員会による「投稿規程」、「FAQ」、「執筆細則」の変更箇所については、以下の新旧対応表をご参照ください。

なお、「FAQ」と「執筆細則」については、今後も随時細かな変更がなされる場合がありますので、投稿論文を執筆される際には、必ず日本文化人類学会ホームページの該当箇所を参照し、最新版を確認してください。

	改定前	改定後
投稿規程	<p>8. 英文要旨の作成・校閲・提出</p> <p>英文要旨は投稿時には不要です。原著論文、萌芽論文、展望論文、および特集序論については、掲載決定後、<u>以下で定める語数を目安に、迅速に二種類の英文要旨を提出していただきますのでそれに向けてご準備ください。短文英文要旨は『文化人類学』に、長文英文要旨はJapanese Review of Cultural Anthropologyに掲載されます。</u>なお、英文要旨は長短ともに英文校閲を行い、投稿者自身が責任を持って本誌に掲載可能な水準を確保することを必須とします。長短の英文要旨が十分な水準に達していない場合、修正されるまで本原稿の掲載が延期されることがあります。</p> <p>原著論文 短文英文要旨150語程度 長文英文要旨1500～2000語程度</p> <p>萌芽論文 短文英文要旨150語程度 長文英文要旨1000～1500語程度</p> <p>展望論文 短文英文要旨150語程度 長文英文要旨1000～1500語程度</p> <p>特集序論 短文英文要旨150語程度 長文英文要旨500～1500語程度</p>	<p>8. 英文要旨の作成・校閲・提出</p> <p>英文要旨は投稿時には不要です。原著論文、萌芽論文、展望論文、および特集序論については、掲載決定後、<u>いづれも150語を目安に、迅速に英文要旨を提出していただきますのでそれに向けてご準備ください。</u>なお、英文要旨は英文校閲を行い、投稿者自身が責任を持って本誌に掲載可能な水準を確保することを必須とします。英文要旨が十分な水準に達していない場合、修正されるまで本原稿の掲載が延期されることがあります。</p> <p><削除></p>
投稿に関するよくある質問 (FAQ)	<p>Q 6 特集はどのような形で組まれるのですか？ (投稿規程 5)</p> <p>A 6 (略) 定期的の特集企画の募集も行います。(略)</p> <p>Q 9 なぜ英文要旨が二つ必要なのですか？ JRCAに掲載される英文要旨は別業績に数えることができますか？ (投稿規程 8)</p> <p>A 9 研究成果の国際情報発信は日本文化人類学会が掲げている重要な目標の一つです。『文化人類学』の中に収められてきた欧文要旨は海外の読者の目には触れにくく、さらに近年では、J-Stageでの掲載時に全体を収録できない (J-Stageの英文要旨枠の上限語数が少ないため) というトラブルも生じていました。そこでこの度、JRCAに長文の英文要旨を掲載することで、より効果的な情報発信を目指すことにしました。一方、『文化人類学』にも体裁上英文要旨は必要であるため、こちらは最小限の字数 (150字) での提出を求めています。</p> <p>JRCAに掲載される英文要旨は、『文化人類学』掲載原稿の英文要約版という位置付けになります。従って業績の一部として掲げる場合には、①これ自体は「論文」の 카테고리には属さない、②『文化人類学』の論文をオリジナルとする英文要約版であることが明記されねばならない、という二つの条件を守る必要があります。(略)</p>	<p>Q 6 特集はどのような形で組まれるのですか？ (投稿規程 5)</p> <p>A 6 (略) まずは企画の段階で本誌における意義や実現可能性を含めて編集委員会で検討いたしますので、特集の企画を考慮しておられる方は編集委員にご連絡ください。(略)</p> <p>Q 9 JRCAに掲載された英文要旨は別業績に数えることができますか？ (旧投稿規程関連)</p> <p>A 9 <削除></p> <p>JRCAに掲載された、84巻1号から86巻4号までの本誌掲載論文の長文英文要旨は、『文化人類学』掲載原稿の英文要約版という位置付けになります。従って業績の一部として掲げる場合には、①これ自体は「論文」の 카테고리には属さないことに留意し、②『文化人類学』の論文をオリジナルとする英文要約版であることを明記する必要があります。(略)</p>

<p>Q10 英文校閲はどのような水準の作業が求められますか。例えば業者に依頼する場合、どのレベルのサービスを依頼したら良いですか？(投稿規程8)</p> <p>A10 短文英文要旨、長文英文要旨のどちらも、英文として自然に意味が伝わってくるレベルまでの英文校閲を必須とします。英文校閲業者は、文章レベルでの校閲(「スタンダード」等と呼ばれる)のほかに、文章の順序を入れ替えたりする、より踏み込んだeditingを行うサービス(「プレミアム」等と呼ばれる)も提供していますが、『文化人類学』の二つの英文要旨で必須となるのは前者のレベルです。業者に依頼せず、英語を母語とする学術的専門家に個人的に校閲を依頼することもできますが、この場合も同じ水準での校閲が達成されるようにしてください。</p> <p>なお、上記のような自助努力による作業を土台としたうえで、『文化人類学』やJRCAの編集委員会から、文化人類学における文章表現という観点から、追加の修正指示が出ることがあります。その場合は、指示に従って、掲載前の最後の修正を行ってください。</p> <p>【参考】英文校閲業者(例)における「スタンダード」レベルでの最低料金の目安(2019年6月現在) エディテージ(editage.jp):『文化人類学』用要旨(150語)で900円、JRCA用英文要約版(2000語)で12,000円 エナゴ(www.enago.jp):『文化人類学』用要旨(150語)で675円、JRCA用英文要約版(2000語)で10,000円 Scribendi(www.scribendi.com):『文化人類学』用要旨(150語)で1,580円、JRCA用英文要約版(2000語)で7,125円</p>	<p>Q10 英文校閲はどのような水準の作業が求められますか。例えば業者に依頼する場合、どのレベルのサービスを依頼したら良いですか？(投稿規程8)</p> <p>A10 英文要旨は、英文として自然に意味が伝わってくるレベルまでの英文校閲を必須とします。英文校閲業者は、文章レベルでの校閲(「スタンダード」等と呼ばれる)のほかに、文章の順序を入れ替えたりする、より踏み込んだeditingを行うサービス(「プレミアム」等と呼ばれる)も提供していますが、『文化人類学』の英文要旨で必須となるのは前者のレベルです。業者に依頼せず、英語を母語とする学術的専門家に個人的に校閲を依頼することもできますが、この場合も同じ水準での校閲が達成されるようにしてください。</p> <p>なお、上記のような自助努力による作業を土台としたうえで、『文化人類学』編集委員会から、文化人類学における文章表現という観点から、追加の修正指示が出ることがあります。その場合は、指示に従って、掲載前の最後の修正を行ってください。</p> <p>【参考】英文校閲業者(例)における「スタンダード」レベルでの最低料金の目安(2019年6月現在) エディテージ(editage.jp):『文化人類学』用要旨(150語)で900円 エナゴ(www.enago.jp):『文化人類学』用要旨(150語)で675円 Scribendi(www.scribendi.com):『文化人類学』用要旨(150語)で1,580円</p>
<p>執筆細則</p> <p>2. 構成</p> <p>原著論文 題名、日本語要旨、キーワード、目次、本文、注、参考文献(英文要旨は12. と13. を参照)</p> <p>萌芽論文 題名、キーワード、目次、本文、注、参考文献(日本語要旨は不要、英文要旨は12. と13. を参照)</p> <p>展望論文 題名、キーワード、目次、本文、注、参考文献(日本語要旨は不要、英文要旨は12. と13. を参照)</p> <p>特集序論 題名、本文、注、参考文献、英文要旨(日本語要旨は不要、英文要旨は12. と13. を参照) (略)</p> <p>6. 本文</p> <p>③文章を引用する場合 (略)</p> <p>引用する文章が長い場合は、地の文との区別を明確にするため独立した段落にするのが望ましい。引用文による段落の左側は全角1文字分を字下げした形とし、また段落の前後を1行開けること。</p>	<p>2. 構成</p> <p>原著論文 題名、日本語要旨、キーワード、目次、本文、注、参考文献(英文要旨は13. を参照)</p> <p>萌芽論文 題名、キーワード、目次、本文、注、参考文献(日本語要旨は不要、英文要旨は13. を参照)</p> <p>展望論文 題名、キーワード、目次、本文、注、参考文献(日本語要旨は不要、英文要旨は13. を参照)</p> <p>特集序論 題名、本文、注、参考文献、英文要旨(日本語要旨は不要、英文要旨は13. を参照) (略)</p> <p>6. 本文</p> <p>③文章を引用する場合 (略)</p> <p>引用する文章が長い場合は、地の文との区別を明確にするため独立した段落にするのが望ましい。引用文による段落の左側は全角1文字分を字下げした形とし、段落の冒頭はさらに1字下げる。ま</p>

<p>引用を示すカギカッコは不要。なお、字下げはWord文書のインデントマーカーを使う形が望ましい（テンプレート中の説明を参照のこと）。</p> <p>12. 短文英文要旨（原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論） <u>投稿時・再投稿時における著者の負担を減らすため、投稿時の英文要旨作成を一切省いている関係上、原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論については、掲載決定後、長短二種類の英文要旨を提出することが必要になる。迅速な提出が求められるので、事前に念頭に置いておくことが望まれる。</u> 短文の英文要旨は、上記4種類の原稿について、投稿区分にかかわらず、150語程度で作成する。（略）</p> <p>13. 長文英文要旨（原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論） （略）</p>	<p>た、段落の前後は1行分を空けること。引用を示すカギカッコは不要。なお、字下げはWord文書のインデントマーカーを使う形が望ましい（テンプレート中の説明を参照のこと）。</p> <p>12. 投稿者情報の匿名化 『文化人類学』の査読はダブルブラインド方式を採用しているため、投稿者名がわかるような情報は匿名化するか、伏せ字にすること。投稿者自身の著作を引用する場合は、本文や注の文献引用では「著者：2000」、「Author：2010」などとする。論文末の文献リストでは、著者名を「著者」または「Author」とし、文献タイトルは「XXXX」「YYYY」のように伏せ字にする。</p> <p>13. 英文要旨（原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論） 投稿時に英文要旨を作成する必要はないが、原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論については、掲載決定後、迅速な提出が求められるので、事前に念頭に置いておくことが望まれる。</p> <p>英文要旨は、上記4種類の原稿について、投稿区分にかかわらず、150語程度で作成する。（略）</p> <p><削除></p>
<p>執筆細則付則2</p> <p>3. アルファベット順リストの場合（略） ⑥新聞・一般向け雑誌の記事等 五十音順リストの場合（上記の1. ⑥）を参考に、アルファベット順リストの一般的原則に従いながら適切な記載方法を用いること。</p>	<p>3. アルファベット順リストの場合（略） ⑥新聞・一般向け雑誌の記事等 五十音順リストの場合（上記の2. ⑥）を参考に、アルファベット順リストの一般的原則に従いながら適切な記載方法を用いること。</p>